

足類4, B-アリの一種多数・カマドウマの一種2, であった。

結果のまとめ

今回, 12科51種を記録する。浜坂町のクモ類は, 23科124種が今までに記録されており(山本, 1976・1977; 本庄・山本, 1990), 今回17種が新たに加えられることにより, 23科142種が明らかとなった。そのうち, ゴマジロオニグモについては兵庫県北部, 但馬地方において初めての記録である。得られた個体は雄の未成熟個体であったが, 八木沼(1986)による形態の記述から本種と同定した。

参考文献

Tanikawa, A (1992) A revisional study of the Japanese spiders of the genus *Cyclosa* MENGE (Araneae: Araneidae), Acta Arac., 41(1):11-85.

千国安之輔(1989)写真日本クモ類大図鑑, 偕成社, 東京。

本庄四郎・山本一幸(1990)但馬のクモ類目録, IRATSUME13・14:1-33.

八木沼健夫(1986)原色日本クモ類図鑑, 保育社, 大阪。

八木沼健夫(1992)日本産クモ類の最近の知見, ATYPUS100:36-40.

八木沼健夫・平嶋義宏・大熊千代子(1990)クモの学名と和名 その起源と解説, 九州大学出版会, 福岡。

山本一幸(1976)浜坂町の蜘蛛, The Biological World 9:73-78.

山本一幸(1977)浜坂町の真正蜘蛛類について, Aculeatus10:5-32.

クミサラグモの交接中の行動について

山本 一幸

クミサラグモ *Limyphia fusca* (Oi, 1960) は, 4月から6月頃に雑木林の林縁を歩くとよくみかけるクモである。その網は, 低木などの枝先に不規則に張りめぐらした糸と, 浅いお椀形をしたシート網からなり, クモはシート網の底に背面を下にして水平に点座している。

この度, クミサラグモの交接している現場に遭遇し, 興味深い行動を観察する機会があったので報告する。

データ

日時: 1995年5月19日, 15時40分~16時00分

(観察のみに要した時間は約15分間)

場所: 兵庫県美方郡浜坂町久谷字袋谷, 標高約40m.

環境: 谷間の小さな溪流の付近。周辺の山地は, 中腹より上はスギ, ヒノキの若年令の植林地。谷沿いは一部コナラなどの雑木林となり, 溪流に面した林縁はノブドウやゴヨウアケビ, サルトリイバラなどの蔓植物が絡みつき, タニウツギやモミジイチゴなどの低木がある。雑木林の林床はササが密生する。

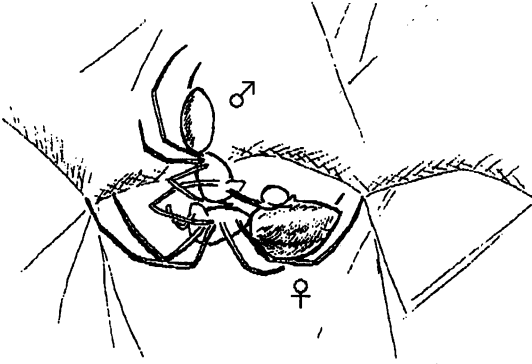
観察材料となったクモは, 雑木林の林縁のノブ

ドウの蔓が枝分れした部分に作られた網にあり, 地表から約1.5mに位置していた。

結果

観察を始める前からすでに, シート網の下中央で, 雌雄が背を下にして交接を行っていた。誤って網のある蔓に触れたため, 網全体が揺れたことにより雌雄が離れ, 雌は網の端へ移動した。交接が中断された雄は, 小刻みに体を動かしながら雌の近くを回り始めた。しばらくして雌が網の中央にもどると, 雄は正面から接近し, 第1・2脚で雌の体にゆっくりとした動きで触れ, そのまま頭部を雌の胸元に潜り込ませて交接に至った。

交接時の雌雄の体勢は, 雄の頭部前面が雌の上顎付近に接しており, 雌は網の下にほぼ水平であるのに対し, 雄はやや垂直に近く, 雌雄の体は直角に近い角度で接しており(次ページの図), その体勢は新海・高野(1984)の写真と同じであった。体が角度をもって接している点ではヨツボシサラグモの交接時の体勢(池田, 1992)に似るが, 筆者の観察したヘリジロサラグモでは(山本, 1981)雌雄がほぼ平行に接している点で異なっている。



交接しているクミサラグモ（上が雄，下が雌）

雄は片方の触肢を雌の生殖器に延ばした。やがて触肢の血のうとおもわれる部分が膨張しているのが観察された。その色は淡黄褐色をしており、ヘリジロサラグモと同じような色（諏訪，1994）をしている。

観察を終えるまでの間、交接は4回中断した。そのうち3回は、観察者の不注意で網に振動を加えたことによるが、最後の1回はクモ自らによる。

交接中、2 cmほど離れたシート網の端に小さな昆虫（双翅目）がかかった。その振動に雌が反応し、昆虫のところへ移動したため交接は中断した。雌は捕えた昆虫に咬みついて動きを止めたが、捕食はせず、その場に残して元の場所へ引き返した。雄は交接が中断した際、しばらくはその場に止まっていたが、雌が帰って来る前に動き出し、シート網全体を広く動き回り、やがて雌が残した昆虫に到達すると、それを網から放し、そのまま下へ落とした。再び、雌の元へ帰ると交接をおこない、観察を終えるまで継続された。

今回の観察で、クミサラグモの求愛→接近→交接→精液の受け渡し→分離といった一連の配偶行動の過程において、何らかのアクシデントが起きて中断しても再開が可能であることが明らかになった。再び交接をおこなう場合、求愛行動のどの程度の段階までさかのぼって再

開するのかは、最初に雌雄が遭遇した時点での求愛行動を観察していないのでなんとも言えないが、初対面の時よりは簡略化されているように思われ、中断の回数を重ねる度に交接に至る時間は短くなっている。

また今回の観察の中で、網に昆虫がかかった後にみられた雄の不可解な行動は興味深く、交接が何度も中断されたため、雌が餌の方に気をとられて、これ以上交接に熱中しなくなってしまう人間臭い心理が空想された。

今回観察されたような、交接が何度か中断されても再開される例は、ムネグロサラグモ（池田，1991）やヘリジロサラグモ（諏訪，1994）でも報告されており、ナニワナンキングモ（佐藤，1982）やスグロサラグモ（佐藤，1984）では途中で雄が触肢に精液を補充し、再び交接がおこなわれることから、サラグモ科ではとくに稀なことではないかも知れない。クモの雄は、下手をすると雌の餌にされてしまうとよく言われるが、一度受け入れられると意外に仲がいいようである。

参考文献

- 池田博明（1989）クミサラグモの交接時期，
KISHIDAIA59:22.
池田博明（1991）ムネグロサラグモの求愛・交尾，
KISHIDAIA61:4-5.
池田博明（1992）ヨツボシサラグモの交尾体勢，
ATYPUS100:1-3.
佐藤幸子（1982）ナニワナンキングモの生活史，
ATYPUS81:1-9.
佐藤幸子（1984）スグロサラグモの生活史，
ATYPUS84:35-44.
諏訪哲夫（1994）ヘリジロサラグモの観察2例，
KISHIDAIA67:9.
新海栄一・高野伸二（1984）フィールド図鑑クモ，東
海大出版会，東京。
山本一幸（1981）クモの配偶行動，IRATSUME5:10-18.